随想

満州佐伯村遭難記（二）

北山直之

（会員　佐伯市中の島一の九の二五）

熊本開拓団

満州パルプの木材集積場で敗戦を知らされ、一行に三日遅れて山に入った。食料はとりあえず四・五日分用意した。夜は熊に襲われぬようたき火をたやさず、明くれば方角を決めてただ歩くばかり。

三日目の夕方、一軒の家を見つけ中に入った。残された写真から日本人開拓民の家と分かったが、突然銃声がしたので、飛び出したまま外で一夜を明かした。翌朝よく確かめると、かなり離れた場所に新しい集落があり、朝の支度をする煙の上がるのが見えた。早くも現地の人達が住み込んでいるらしかった。這々の体でこの村を後にした。

それから何日歩き続けたか分からない。あるとき稲穂の稔る水田地帯に出た。また開拓団かと思ったが、ここで十七・八の青年に出会い朝鮮人の村と知った。幸いこの青年は大の親日で、集落は危ないからと田圃の番小屋にかくまい、夜には食事を届け、翌日、近くに日本人開拓団がいるとして、そこまで送ってくれた。

かなり歩いて到着したのは、光世という開拓団であった。そこに三人ばかり日本人がいて、ここは土民の襲撃を受けて食料がない。四キロメートル先に熊本の開拓団がいるので、そこに行けと教えられ、再び二人で歩いた。

熊本村の人達は暖かく迎えてくれた。不思議にもこの開拓団には、まだ平常と変わらぬ生活が続いていた。そこで復員して来た人から、南の方は比較的治安がよいと聞かされた。それは私の家族の待つ場所である。

数日して団の幹部から「ここに残るか、それとも南に向かうか」と問われ、独りで南に向け帰る決意を固めた。

※本人はひたすら南の方向を目指すつもりであったが、幸いなことに、いつの間にか西に進んで五常県に入っていた。

※光世開拓団…五常県に熊本・広島両県から入った義勇隊開拓団。

※東小山子熊本開拓団…同じく五常県（ハルビン南東約二〇〇キロメートル）に入った熊本県の開拓団。

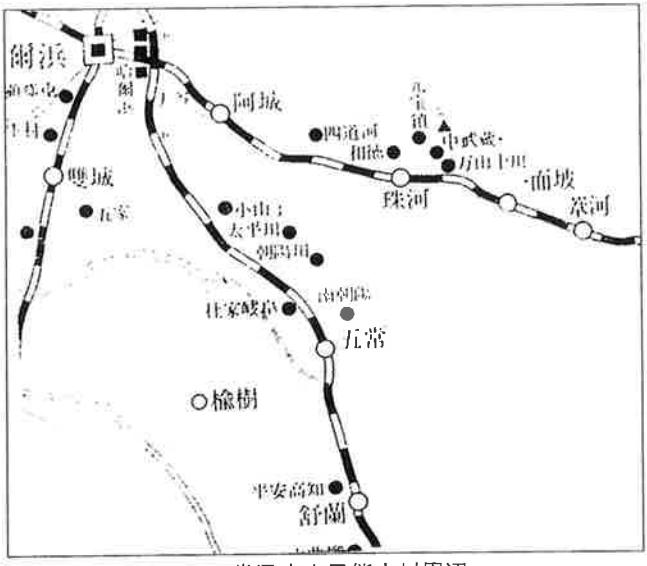
ハルビンへ

いよいよ私独りの旅が始まる。熊本村の人に贈られた満服を着用、ふんどしも捨てて完全に中国人となり、教えられた道をたどり、一夜野宿して五常の駅に着いた。列車はまだ日本人の手で動いていた。夕方ハルビンの駅に着き、その晩は中国人と朝鮮人の間にもぐりこみ、軒下で一夜を明かした。たまらなく寂しく心細いなか、無意識に南無阿弥陀仏が出て、これを繰り返すうち不思議に気持が落ち着いて来た。

朝から列車を待ったがなかなか来ない。そのとき一人の満人が饅頭を出して私にくれた。どうやら一人前の乞食と見られたのである。

新京（現在長春）へ

やがて列車が来た。有蓋貨車だが難民を乗せ、ソ連兵が警備しており一般人は乗せない。中国人と朝鮮人は屋根の上に乗るのである。私もよじ登ったがそこは意外に広かった。列車はのろのろ運転で南に向かったが、途中シベリヤに送られる日本軍捕虜の列車とすれ違った。あのとき…後方連絡に出されたことが、私にとって幸運だったのかも知れない。



五常県小山子熊本村周辺

この列車がある駅で停車した。なかなか発車しないのである。夜になって女性の泣き叫ぶ声が聞こえてきた。ソ連兵に襲われているに違いない。敗戦国民の悲しさ、何の助けもできない。残念、無念である。

夜が明けてようやく発車。その日なんとか新京に着くことができた。新京の街は日本人の難民でごった返していた。中にはすでに息絶えたわが子を抱きしめ放心している姿も見えた。女性が丸坊主となり男装している者も多い。ソ連兵の魔手から逃れる手段に違いない。新京では在留日本人が難民の救済に全力を挙げており、私は春日神社に収容された。この境内はかなり広いのだが、一面墓場となり盛り土の山が何とも悲惨であった。

団に帰る

新京には三日いて、再び屋根の人となり昌図に向かったが、一人の親切な満人に助けられ、かろうじて八路軍兵士の目を逃れることができた。その人は私が日本人であることをすぐ見抜き、唖のまねをするよう促した。交渉事はすべて代わりに出て、最後まで唖の満人としてかばってくれたのである。感謝の外はなく、この人のことは生涯私の脳裏から離れないであろう。

やがて無事昌図に下車した。ここは思ったより静かであった。知人の家に一泊。あまりのみすぼらしさに、服を変えるよう勧められたが、道中の安全を考え、そのままの姿で家族の待つ佐伯村に向かった。隊を離れて四二日ぶり、生きて帰れたのが不思議でならなかった。

襲撃を受ける

帰ってみると団では稲刈りの最中であった。聞くところによると、私の部落はつい先日、一四人もの土匪の襲撃を受け、かなりの金品を奪われたとのこと。このような状況の中、何と言っても食料の確保が絶対で、専ら稲刈りに集中したのである。

ようやく刈り取りも終わり、部落まで運び稲の山ができた。ところがこの作業の終わるのを待っていたかのように再び襲われた。土壁に囲まれた三浦一さんの家に、北山・春山部落の全員が避難していたところに、一発の銃声を合図に門が破られ、土匪がなだれ込んで来た。必死の抵抗も多勢に無勢、何ともし難く敵のなすがままとなったのである。血を流す者、一糸まとわぬ者、それは

もう筆舌に尽くしがたい惨状で、さながら地獄の図絵を見るかのようであった。

ようやく小学校まで逃げた。この日の犠牲者は死亡した染矢新太郎さん（上野）、工藤弥助さん（中野）の二人、染矢菊蔵さん（上野）も太ももを槍で刺されて重傷、兄武雄（上野）は上唇をピストルの弾が貫通、北山節子さん（教員）は背中に刀傷を受けていた。そのほかに河野太さん（明治）、岡田貞子さん（中野）、大竹咲子さん夫婦・大竹八千代さん（いずれも川原木）ら五人が行方不明になっていたが、二、三日して、無事に小学校にたどり着いた。

この人たちは田圃のワラの中に隠れていたそうで、これを盗みに来た満人に見つかったという。そのあと土匪らしい男に「もう団には人などいない。自分たちと一緒に行こう」と誘われたが、運よくそこに元小学校に勤めていた李という少年が来て、皆小学校にいると教えてくれ、危うく難を逃れたという。十月十二日のことである。

※北山部落…名前は八方だが北山武雄氏が長をしており、この名があった。主として上野村・中野村出身者が居住。

※三浦部落…名前は大楡樹、三浦一氏が長、主として川原木出身者がいた。

※李少年…元小学校の給仕。森脇弁一校長に非常に可愛がられていた。

この日の惨劇を最後に、団本部と小学校に全団員が集まったのである。八月十五日の敗戦により満州国は崩壊し、佐伯開拓団も消滅し、ただ二つの難民の集団が残るだけとなった。

（つづく）

昌図県郭家佐伯村周辺